

パネル・ディスカッション：前立腺癌の診断と治療

序にかえて

司会 京都大学医学部泌尿器科学教室

吉 田 修

(1)

わが国における前立腺癌は確実に増加している。この傾向はさらにつづくものと考えられるが、それは日本人、ハワイ日系アメリカ人（ニセイ）、アメリカ白人の前立腺癌罹患率（1970年）の比をみても 1:8.9:14.5 であることや、また本邦における前立腺癌による死亡者数は毎年増加の一途をたどっていることなどの事実より疫学的に裏付けられていることである。

いずれにしても1980年代の泌尿器科臨床における前立腺癌治療の占めるところは、現在よりもさらに大きく重要なものとなることは疑うべくもない。

欧米においては前立腺癌の男子悪性腫瘍疾患の中に占める割合は大きく、古くより臨床的および基礎的研究が多くなされ、現在いろいろ議論もあり、意見を異にした点もあるとはいえ、まずはおのおのが確立されたものをもって診療にあたっているといえる。

一方わが国においては症例数が欧米に比して少なかったとはいえ、欧米から取り入れたものをそのまま応用しており、“日本人の前立腺癌”の臨床という点からみると、現在多くの未解決な問題点を残しているといえる。

ここにおいてパネル・ディスカッションに前立腺癌の診断と治療をとりあげたことは、まことに時宜を得たものといえる。

(2)

診断についてとりあげたのは、臨床的進展度(stage)に関する正確な診断法である。それは前立腺癌の適正な治療のために必須のものであるからである。

現在行なわれている一般的な診断法、すなわち直腸内触診、酸フォスファターゼなどの酵素のパラメーター、骨シンチグラフィーなどの RI 診断法、各種レ線診断法などによりかなり正確に stage 診断を行なうことが可能とはいえ、さらにすぐれた診断法の開発は前立腺癌の根治という観点よりきわめて重要なこと

である。そこでこのパネルディスカッションでは一般的診断法はとりあげず、特に最近多くの注目をあつめている、あるいは進歩の著しい診断法として、超音波診断法、コンピューター・トモグラフィー、前立腺癌の腫瘍免疫学的診断をとりあげてみた。

(3)

治療については、わが国における現況と問題点を明らかにしたいと考えた。Huggins の研究によりはじめられた抗男性ホルモン療法は、前立腺癌の治療において大きな役割を演じてはいるが、VA グループの研究により、エストロジェン療法の合併症としての心・血管系障害による死亡数も少なからず、エストロジェン療法により減少させた癌死を相殺していることが報告されており、アメリカにおける抗男性ホルモン療法は活発な議論の対象となっているところである。

わが国において、エストロジェン療法の合併症である心・血管系障害の現況は明らかではない。さらにホルモン非依存性前立腺癌の治療に対しても、いろいろな試みはなされているものの、重要な問題点として残されたままである。また放射線治療法、抗癌剤による化学療法、さらには免疫療法などをいかに前立腺癌治療にとり入れて、治療成績を向上させるかという点も大きな課題である。

(4)

それぞれの現況と問題点は、各パネリストからよせられた論文を読んで把握してもらいたい。本パネル・ディスカッションが現在の前立腺癌治療に少しでも役立ち、また問題解決への足がかりとしていくばくかの役割を演ずるならば大きなよろこびである。

この有意義なパネル・ディスカッションを企画され、またその記録に多大の御支援をいただいた第28回泌尿器科中部連合地方会会長多田 茂三重大教授に敬意と謝意を表する。